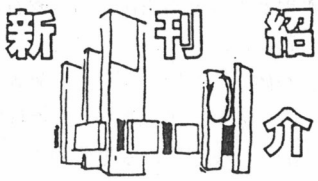
https://rodosoken.com/



鹿児島経済大学地域総合研究所編

『地域のくらしと高齢化社会』

本書は、鹿児島経済大学地域総合研究所で取り組まれた研究プロジェクト「高齢化社会と鹿児島－その課題・対応・展望」の成果の一端である。高齢化の社会的対応のあり方は地域社会のあり方と密接にかかわっており、その検討には地域の社会の構造や文化を視野に入れた調査と研究が不可欠であること、高齢化先進県である鹿児島県の現状と課題を明らかにすることは何らかのインパクトとなりうることとの観点にたって、実態調査を踏まえた「実証性をもった地域からの発信」をめざしてまとめあげられた共同労作である。

全体は8つの章から構成されている。総論的に高齢化および高齢化社会を論じた第1章に始まり、消費生活（第2章）、住環境（第3章）と続き、第4章から第6章でマンパワー問題を多面的にとりあげ、最後の第7章と第8章で高齢者雇用を分析している。総論では、高齢化の一般的分析に続いて、県外転出による若年層の人口割合の低さゆえに、長くない平均寿命にも拘わらず高齢化率が高く高齢者のみ世帯の割合も高い鹿児島の特徴が明らかにされ、消費生活・住環境の分析では、移動の制約ゆえに地元の馴染みの店での買い物を求める高齢者特有の消費サービスニーズとこうした地域の消費スタイルを維持する必要性、全国一高い高齢者の独居率とその独居高齢者の持ち家率・居住環境の低さ、高齢者世帯への公的な住宅供給の必要性などが析出されている。またマンパワー問題の分析では、社会福祉関係の前職をもたない老人ホーム施設長の多い鹿児島の実態と資格化の必要、社会福祉現場実習体験による学生の意識の前進と福祉実習教育の積極的意義、実践的で継続性のあるソーシャルワーカーの卒後教育の必要性などが、実態調査にもとづきながら明らかにされていく。最後の高齢者雇用については、鹿児島経済の停滞性・低生産性に規定された高齢失業者の固定化・累積化の実態、高齢者雇用問題を失業問題として捉える視点を欠いた県の労働政策の現状、それに対置すべき政策の基本方向等が鋭く分析されている。

高齢化にともなう地域社会の変化や課題は、いうまでもなく地域的な特性を纏って現出する。しかし、地域性の徹底した分析は逆に問題の普遍性を明らかにし問題解決の共通の方向を指し示す。本書はそのことを実証してくれている。こうして丹念な実態分析を踏まえた「地域からの発信」が高齢化施策の前進には欠かせない。是非一読をお勧めしたい。

（日本経済評論社・1997年4月刊・3,500円）

（横山寿一・金沢大学教授）

千田忠男編著

『労働科学論入門』

現代の過密労働規制を課題とする運動団体と共同した「現代労働負担研究会」の中心メンバー、千田忠男氏を編者とした、労働医学・社会医学の若手・中堅研究者による意欲的な学習テキスト－現代社会と働き方を考える『労働科学論入門』が刊行された。

これは、著者たちの日頃の大学での講義、働くものの労働安全衛生やいのちと健康を守る運動への協力、産業衛生学会などへの研究活動をふまえて、学生、労働者、労働安全衛生担当者、研究者などに広く読まれるものをと共同で執筆したものである。

その内容は、第1部として、労働科学論の基本を今日の研究と実践の成果をふまえて、自然と人間労働、労働の動態、労働の生産力の向上、社会の中の労働、生産様式の変革と労働の変容で構成されている。第2部は、現代労働の問題と課題を、労働の動態と負担軽減、過労死とその予防、職業性ストレスとその緩和、中高年者の労働と健康、海外派遣と心身の健康管理、コンピュータ労働の現実と展開、養護学校の教員にみられた職業病、それに執筆者の問題意識を議論した「これからの労働のあり方を考える」と、終章に「労働の未来」を問題提起している。

読んでみての感想と意見は、第1部は、労働医学・社会医学の立場から、今日の研究成果をふまえて、